

## 私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「泌尿器科」

信州大学医学部泌尿器科学講座  
上垣内 崇行

学生時代に所属していたスキー部の先輩方の進路を見ていると外科系が割合多く、当時は自分も卒業時に外科系かなあ程度の漠然とした考えしかありませんでした。外科系のどこにするか入局先を決めかねていた私は卒後臨床研修が義務化される前でしたが、卒後ローテーションを選ぶこととし、親孝行も兼ねまして地元の日本赤十字社和歌山医療センターで2年間初期研修を受けることとしました。

そこはいわゆる京都大学の関連病院でほとんどの科が京都大学医局からの派遣で、周りを見回しても自分のような根なし草は一人もおらず、事務の方に聞いても私のような飛び込み研修医は10年ぶりぐらいだったようです。そこで外科系の基本である腹部外科を1年間、それ以外は麻酔、救急、泌尿器、透析をそれぞれ3カ月ずつ研修して回りました。私のような研修医は他にはいませんでしたのでこの科でも私をどのように扱ってよいのか分からずほぼ放し飼いのような状態

でした。その中でも最もひどかったのが泌尿器科で約3カ月ほとんど透視室の片隅で造影剤の注入係をしていました。

そのような経験をした私ですが泌尿器科を選んだ大きな理由があります。腹部外科研修中のことです。当時まだ独身で嫁さがしに奔走中であった私は緊急手術でたびたび飲み会をキャンセルし、素敵な出会いを逃してしまうという悲しい経験が何度かあり、緊急手術に対してやり場のない怒りを覚えるようになりました。さらに、当時のオーベンが日曜日の緊急イレウス解除術の後、家族サービスの予定でもキャンセルしたのか、手術室の片隅で小学校に上がる前の二人の娘に謝りの電話をしている後姿を見て、“緊急手術のない外科系に行こう”と心に誓いました。

緊急手術がなくてある程度の全身状態も見ることのできる外科系＝泌尿器科、と考えた自分は信州大学医学部泌尿器科学教室に入局いたしました。この選択は間違っておらず、幸い泌尿器科入局後緊急手術は数えるほどしかありません。

最後に、自分が泌尿器科を選んだことを両親に告げた時少しさみしそうな表情をしたことが今でも少し気になります。

(信大平12年卒)

## 私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「血液内科」

信州大学医学部内科学第2講座  
中澤 英之

教養1年目の時、学生指導担当だった村石先生から「会ってみないか」と紹介されたのが、当時泌尿器科と第2内科医局に客員教員としていらしたエバリー先生だった。数週間後、エ先生の院内の講演会で会場のお手伝いをしたのだが、その講演会を主催していたのが現在松本病院にいらっしゃる血液内科の北野先生だった。聴衆の中には、後に下宿先を紹介してもらうことになる第2内科病棟の矢野口婦長さんも座っていた。

エ先生からはその後もしばしば声をかけてもらうようになった。私は信州大学が二つ目の大学であったため、教養課程で取得しなければいけない単位も少なく、時間的にも余裕があり、手伝ってくれといわれて断る理由もなかった。北野先生からも自主研究などでいろいろ指導いただいた。その後、両先生を通じて血液内科の先生方と話をする機会が自然と増えてきた。卒後の進路を決めるときは人とのつながりを大事にしない、と村石先生がおっしゃっていたことを思い出し、このまま第2内科・血液内科に入ってしまうのか、と他力本願的な「赤い糸」を勝手に感じることもあった。しかし、そもそも血液内科が何をやる所かがよくわかっ

ていなかった私にとって、赤い糸だけで専門を決めるのは心もとなく、将来の進路は漠然としたままだった。結局、その後も複数の先生に相談を持ちかけては、人並みに悩むことを繰り返した。

やがて臨床研修が始まった。研修先の病院では「一番若い医者が血液疾患を見る」という不文律があり、血液疾患の患者を当然のごとく多く担当した。指導医の背中越しに、あるいは自分で直接、複数の患者を目にするようになると、指導医の先生たちがつぶやいていた「血液って大変だ」という台詞が身にしみて分かる瞬間があることに気が付いた。逆に、患者さんとがっぶり四つに組んだときに聞こえてくる患者さんの声に、気持ちを揺さぶられることもしばしばあった。自分の診療態度が医師－患者関係に直接影響しうると初めて実感したのも血液疾患の患者だった。私の臨床研修期間は、血液内科の臨床の面白い側面と大変な側面とを垣間見るような時間だったとも思う。

研修医期間も終わろうとするとき、血液内科の先生方からお誘いのメールやお手紙をいただいた。白血病の寛解導入療法すらく知らない一研修医にとって、手元の赤い糸は以前と変わらず細く頼りなかった。しかし、反対側で引っ張ってもらっていたその糸は、まだまだぴんと張っているように見えた。「手繰り寄せてみようか」届いたメールと手紙を見ながら、私は気持ちを決めた。

(信大平13年卒)